武州みたけ

第六十三号

「神　饌」

神事が始まる前、御師たちがお供え物の準備をし素早く神棚が整えられていく。この日も金目鯛を麻でさりげなく縛っていた。いつも丁寧で美しい所作に見惚れる。

（写真・文　鶴巻育子）

御嶽山こぼれ譚

山中に穴掘り暮らした男の二〇〇日

かつて私の家は宿坊のかたわら商店を営業しており、絵葉書も販売していた。最近目にすることの増えた〝大正時代〟や〝昭和時代〟の話である。そんな記録に残さないまま記憶が失われつつある時代の絵葉書について調べ眺めていると、ふと不思議な語句に目を引かれる。

「御嶽山上ニ於ケル穴居生活」

写真には三角屋根の建物。別の御岳山だろう。だが、同じ建物を写す絵葉書には「武蔵國御嶽山 村井弦齋先生の居穴」とある。この御岳山だ。居穴とは？そして村井弦斎とは―？

村井弦斎（むらいげんさい）。本名は寛（ゆたか）。文久三年（一八六四）生、昭和二年（一九二七）没。愛知県三河の武家出身。明治維新後に上京し英才教育を受け、若くして渡米。帰国後はジャーナリスト、小説家、編集者と幅広く活躍した。何故このような文化人が御岳山中で穴居（けっきょ）することになったのか。その発端は、弦斎の「食」にまつわる探究心であった。

弦斎の代表作『食道楽』。明治三十六年（一九〇三）に発表された小説で、男女が食を通じて惹かれ合うお話、なのだが、物語に必ず料理か調理か食材の話がついてまわり、都合六百余種もの食物が登場する。連載時点で人気を博したが、単行本においては、調理や食材についての注釈、巻末付録に栄養分析表、メモ欄までついて、もはやレシピ本。この斬新さも受けてか大ヒットし、財を成した弦斎はありとあらゆる料理を食す美食家としても名を馳せる。ところがある時、食と健康の因果関係、病気への関心から、火を使わない生食、木や草を中心とする木食、いっそ食べない断食など、いわゆる「食物療法」の類を取材し研究、自らを被検体として実践しはじめる。その末に目指したのが、自然のなかで自然を食して生きる〝天然生活〟。その舞台として御岳山を選んだのだ。

入手したのは雑誌『婦人世界』。明治三十九年（一九〇六）に刊行された女性向け情報誌の草分け的存在で、主に料理や裁縫、流行のファッション写真や挿絵、連載小説やコラムなどが掲載される。弦斎はこの雑誌の編集顧問を勤めながら記事も執筆しており、大正十年（一九二一）二月号から「武州御嶽山に於ける私の山中生活」と題した連載をはじめる。その第一回の冒頭を要約してみよう。

〈大正九年八月十二日。天然生活を望んだ私（弦斎）は、関東近郊の山々からまず交通の便の良い御岳山を選び、甥とともに宿坊「西須崎坊」へ赴いて話をしてみると、神社の許可も得てもらえた。翌日下山、十四日には道具一式を持って再登山、テントでの山中生活をはじめたのだ〉という。

すべてが克明に描写されているとは思わないが、あまりにもスムーズ過ぎやしないか。弦斎が著名人であったとはいえ、未だJR御岳駅もケーブルカーもない、観光地として開かれる前の御神域の山で、こんなに都合よく事が運ぶものだろうか？

というわけで、ひとつ仮説をたててみる。当時、弦斎が住んでいたのは神奈川県平塚市。JR平塚駅南の海側、現在の八重咲町から松風町にかかる一万六千坪もの土地に庭園や畑を営み暮らしていた。その一部が村井弦斎公園として残っている。そんな白砂青松の平塚海岸と、紫幹翠葉（しかんすいよう）の御岳山をつなぐものがある。「御嶽講」だ。当誌読者の方には言うまでもないが、「御嶽講」は武蔵御嶽神社を崇敬する村単位などで結成される団体を指す。寛保四年（一七四四）には講の代表者が当社を参拝する「代参」が行われた記録があるが、その際、参拝者は五穀豊穣や講中安全の祈禱を受け、御師の宿坊に泊まる。別の時期には御師が講のもとへ訪れ、家々に御札を配って廻る。時代は変われど、この講と御師の往来が現在まで続いている。

さて、弦斎が訪れた「西須崎坊」。この西須崎こそ、現在も平塚周辺の御

嶽講を担う御師なのだ。つまり、弦斎が西須崎坊を訪れたのは偶然ではなく、事前に地元・平塚の御嶽講講員に西須崎との橋渡しを頼んでいた、または講員から西須崎を紹介されていたのではないだろうか。証拠はない。ただ、講と御師との関係は深い。江戸時代から続く家と家同士の世代を超えた付き合いが重なり、親戚とも友人とも見紛うような関係を築く場合もある。そんな講員から頼まれれば、御師は無碍にできる訳がないのだ。講からのひと押しが加わるだけで、この山での事の運びさえ変わるとも考えられる。

事実、当時の西須崎家当主・須崎宮治氏は、突然現れ突飛な申し出をしてきた弦斎を手厚く迎え、神社へ取り計らい、山中生活にかかる準備さえ手伝った。入居後も、道具の貸与や弦斎の同伴者へ毎日の食事提供をしたほか、何かにつけて様子を見に行ったり、農作物を差し入れたり、朝晩のテントで凍える弦斎に「竪穴式穴居」の建造を勧めたりしている。もっとも、弦斎自身が齢六十間近の老人（当時）であるうえ、この生活自体が雑誌へ連載予定という状況である。西須崎も山へと招き入れた身。何かあってはいけない、という思いを抱くことも想像に難くないのだが。弦斎と御嶽講とのつながりは文中に見あたらず、西須崎家にも当時の仔細は伝わっていない。

ちなみに、この「竪穴式穴居」こそが絵葉書に写る建物である。穴居とはいうものの、穴のうえに頑丈な床板と畳、約四畳半の広さに執筆用の机を構え、保温調湿に優れる塗りの荒壁が囲む。水道や電気こそないものの、採光や風通しまで考えられた立派な住居であった。大工や左官、資材の手配はもちろん西須崎によるもの。よく見れば、入口の暖簾や壁掛に、神社の内装に用いる壁代（かべしろ）が流用されている。弦斎曰く、白いため室内が明るくなって良いとのこと。

弦斎は約二百二十日もの間、山中生活を営みながら山々の散策や神事への参列、宝物殿の拝観などをして御岳山を満喫している。我が世の春を謳歌していた文化人が突然、山中で仙人のように暮らしているらしいという話は注目を集め、取材や野次馬もやって来た。それが新聞などに掲載され、口コミでも広まっていく。雑誌発行部数の増減については不明だが、すべて広告戦略の内だったのだろうか。ともかく、連載において神社の由緒や山の名所を紹介し、眺望や自然環境を美麗な表現で描き伝えた弦斎は、御岳山の近代史において、当山の知名度を上げ来山者を増やした人物と言っても過言ではないだろう。

ところで。そんな弦斎のもとを訪ねた人たちは口を揃えて、「こんな所にひとりで居らして気味が悪くありませんか」と聞いたそうだ。この御岳山中で「こんな所」呼ばわりされ、猛獣や天狗が出そうともいう不気味な場所。それは一体どこなのだろうか…。

次回、「長尾の峰といふ處」へつづく。

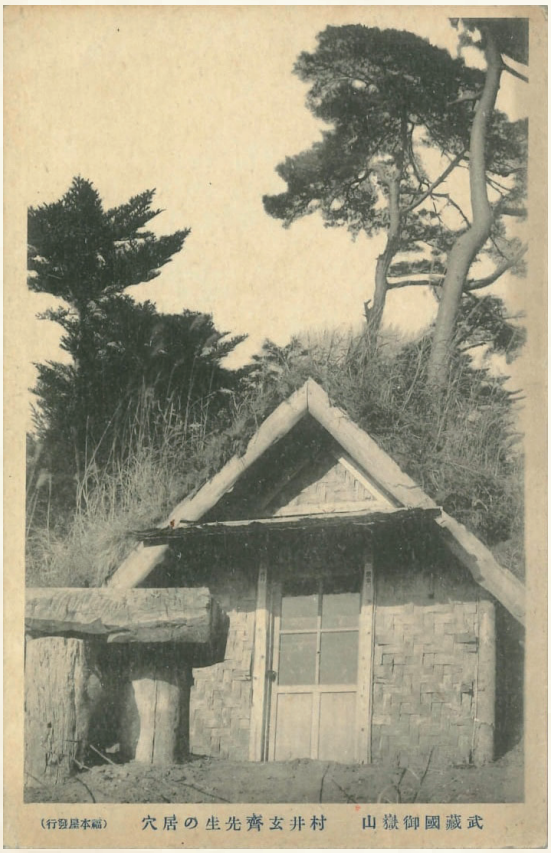
（文…権禰宜　服部朋也）

＜取材協力＞

西須崎坊 蔵屋　当主 須崎裕氏、通子氏

＜主要参考文献＞

黒岩比佐子『『食道楽』の人 村井弦斎』（岩波書店、平成十六年）
村井弦斎「武州御嶽山に於ける私の山中生活」『婦人世界』第十六巻第二號～第六號（実業之日本社、大正十年）



こころに余裕はありますか

権禰宜　馬場 慶太郎

私たちの生活は日々便利になり、あらゆるコト・モノが目に見え、手に取れる世の中になりました。スマホから地球の裏側で流行している洋服まで知ることができるのです。そんな現代に生きる私たちが一日に享受する情報量は、江戸時代に生きた人々の「一年分」に相当するといいます。平安時代にまで遡れば、受け取る情報は現代のたった一日で「一生分」だそうです。目まぐるしく流れる情報や、日に日に進歩する技術、豊かになった生活の裏では悲しいニュースも後を絶ちません。戦争すら起きています。国内に留まらず世界で起きていることが瞬時に把握できる昨今では、煌びやかな高級車に乗る人、高級ブランドに身を包む優雅な暮らしをする人たちの生活までわかります。自分と他人とを簡単に比較できてしまうのです。

様々な情報が飛び交う日々に私たちの心は間違いなく「疲れ」を溜めてしまっています。現代に暮らす私たちは、そんな心の疲れからくるストレスの捌け口として、他人を物理的に傷つけたり、家に火を放ったりしてしまうのかもしれません。かの様なことは一昔前からあったように思いますが、最近発達したインターネットやSNS上では特に、名前も知らない、ややもすれば顔すら見たことのない赤の他人に誹謗や中傷を浴びせ、精神的に追い詰めてしまうといった質の違う手段が目立つようになりました。それらの殆どは直接自身に関係のないことに腹を立て、関係のない他人を傷つけているのです。察しと思いやりを重んじる日本人にとって、相手の顔が見えないインターネットは、思ったことを憚（はばか）らず表現できてしまう、ある種の良い手段だったのかもしれません。

心の疲労は本人に限らず身近な人、よそ様にも害をもたらします。日本人には古来より自然を重んじ、神仏に祈りを捧げ、他人に感謝する美しい心が備わっています。神社は今も昔も変わらずそこにございます。時代が如何に変われど大神様は変わらず私たちをお守りくださっています。心の余裕がないと感じたら、お山に足をお運びいただき、自然に触れながら神に手を合わせてみてください。お身体は少々疲れるかもしれませんが、少しでも心の疲れを癒す一助となりますれば幸いでございます。

御岳山売店紀行
宝亭支店（たからていしてん）

夏の御岳山登山、お目当ては日本一の群生を誇るレンゲショウマの花見である。ケーブルカーに乗って山上の御嶽山駅に着くと、この花を観ようという登山客で大変賑わっており、人の多さに少々疲れがでた。駅の正面からふと見ると小綺麗でこぢんまりとした売店が目にとまり、一先ず休憩と食事をすると決め、中に入った。「宝亭支店」の入口には土産物や飲物、昔ながらのアイスクリームの冷凍庫が有りどこか懐かしい。奥にはカウンターと小さなテーブルがいくつか置いてあり女将さんらしき女性が立っていて小さな茶店の雰囲気である。椅子に座りメニューを見ると「ひきずりうどん」が目にとまった。初めて見る料理に興奮を抑えつつ注文した。

「宝亭支店」は戦後昭和二十六年ケーブル開通の時に現在の女将映子さんの父鈴木新一郎氏が宿坊寶壽閣の先代の紹介でこの地に店を構えたのが始まりで、一階は食事処、二階が喫茶店という店構えだった。当時二十二歳の映子さんは務めていたカルピスを辞めて、住んでいた川崎から家族でこの山に来たそうである。

店の歴史を伺っていると、弟の新吾さんが「ひきずりうどん」を運んできてくれた。溶き卵が入った付け汁に、こしのあるうどんをネギと大根おろしを絡めて食べる、シンプルだが実に美味しい。なるほど卵が絡み麺を引きずっているからなのか、美味しくてあとを引きずるという事なのか名前の由来を考えながら美味しく食した。

六十年ほど続く売店を兄弟で守っている事にも心揺さぶられたが、この山と共に刻んだお二人の歴史にも感銘を受けた。御嶽山駅に着いて最初の売店宝亭支店は永きに渡り参拝者、登山者を見てきた歴史ある売店である。

上：1954年当時　右手の2階建て「宝亭支店」

やさしく見送る
女将の映子さん

御嶽神社あれこれ

太々神楽の里帰り

荒川区南千住鎮座の石濱神社は、神亀元年（七二四）九月十一日に聖武天皇の勅願により創建されたと伝える歴史ある神社です。中世には関東武士の信仰も厚く、近世には『江戸名所図絵』に描かれ「神明さま」と親しまれ、地元はもとより関八州より多くの参詣者で賑わいました。そして今年創建一三〇〇年を迎え、十月十四日に奉祝行事の一環として、当社の太々神楽が石濱神社の特設舞台で演じられる事になりました。

この石濱神社と御嶽との関係は、安永六年（一七七七）御嶽の神主（現宮司）に迎えられた、江戸橋場神明（現石濱神社）神主鈴木兵部の子息である郡胤の頃まで遡ります。そして鈴木郡胤の時に、橋場神明からほど近い眞先稲荷

より神楽が御嶽に伝わりました。御嶽神社に伝えられた神楽は、素面神楽と面神楽に大別されます。素面で舞う神楽は寛延二年（一七四九）に儀式的な神吉田流神楽が、面神楽は安永年間（一七八〇年頃）に江戸眞先稲荷より神話を題材とした里神楽が伝えられました。それ以来御嶽を信仰する各地域の集まりである講にとって、太々神楽を奏上する事が念願であり講員拡大に寄与し、神社にとっても重要な儀式として、舞と笛・太鼓は御師により二百数十年の間、代々受け継がれてきました。眞先稲荷（現真崎稲荷神社）は、天文年間（一五三二～一五五五）にこの付近にあった石濱城の千葉之介守胤が、一族隆昌を祈念し城内に祀ったと伝えます。その後大正十五年には石濱神社境内に遷座され、今は本殿東側に祀られています。

石濱神社は浅草北方の隅田川沿いに鎮座し、関東大震災（一九二三）や第二次大戦では大きな被害を受け、残念ながら昔の面影は残されてませんが、寛延二年（一七四九）と安永八年（一七七九）に建立された石鳥居が奇跡的に助かり、現在参道に移設されています。震災や戦禍の中、この年代の鳥居が保存されていた事に、御嶽との縁をより強く感じます。太々神楽が取り持つ縁で、約二五〇年ぶりに里帰りして、石濱神社境内で太々神楽が演じられる事は、とても感慨深いものがあります。

御岳ビジターセンター

ムサくんだより

ビジターセンターおすすめの「夜神楽」鑑賞

かつては三〇度を越えないと言われた御岳山も、茹だるような暑さに包まれたこの夏。そんな御岳山の夏が過ぎ去ろうとしています。日に日に夕方は心地の良い風が抜け、過ごしやすい気候となってきました。今回は、御岳山の夕方以降の愉しみ方の一つをご紹介します。

「武州みたけ」を読んでいる方に知らない方はいないであろう「夜神楽」。武蔵御嶽神社の「神楽」は東京都の無形文化財に登録され、六月から十月の期間、武蔵御嶽神社神楽殿にて毎月第四日曜日の二十時から、どなたでも無料で観覧することができます。

この夜神楽、見る視点をたくさん持つことで楽しさが倍増しますので、今回はビジターセンタースタッフがおすすめする観覧の視点をご紹介します。

まず一つ目は、舞のストーリーとなる「神話」について少しだけ知ってから見ることです。よく舞われる演目は「神功皇后（じんぐうこうごう）」「鯛釣り」「稲荷」など。登場人物やその人物像が分かると所作や佇まいに“意味“が見えてきますよ。

そして、二つ目は「楽」。奏でられる楽の音色は、どれも雅でありながら場面によって大きく雰囲気を変えます。音色からどんな楽の音か当ててみるのも面白いですよ（奏者は見えないので答え合わせは出来ませんが…）。

最後は「装束と面」です。登場人物それぞれを象徴する装束や面には見どころがいっぱい。人物像と装束がリンクすると、神話の一部始終がそこに見えてきます。

さあ、スタッフがおすすめする夜神楽の楽しみ方はいかがでしたか？ぜひ、いろんな視点で満喫してくださいね！

太々神楽のススメ

「武蔵御嶽神社太々神楽」は江戸期に端を発し、山に住まう神職が舞いと奏楽を代々受け継ぎながら伝承しています。かつては、春の風物詩ともいえるほど日に何度も奏上されていましたが、時代の変化とともに回数は減少し、現在は年に数えるほどとなってしまいました。

太々神楽奏上は最も格式高い参拝方法であり、祭礼を執り行い、神楽を舞う、神社をあげて行う大きな祝事でもあります。また、奏上された方のみがお受けいただける特別な御札「神楽大麻」は、一万回のお参りと同じ御利益があると云われています。

御神前に奏上し、大神様の御霊を御慰めするとともに人も楽しむ神人和楽の太々神楽。詳細や不明点、日時等、お電話にて気軽にお問い合せください。どうぞ皆様のお申し込みをお待ち申し上げております。

御嶽菅笠（靱矢嘉史家所蔵）

灯籠奉納

多くの方にご奉納いただき誠に有難うございます。

銅鳥居上より神社に向かって建立させて頂く予定です。

［一基　奉納者（順不同・敬称略）］

嬉賀眞仁
熊谷剛文・熊谷節子
村野　廉

令和五年九月一日～令和六年八月三十一日
（一万円以上順不同・敬称略）

株式会社 荒井電業社　荒井茂典
銀座ダックス・ダックス　巳作和恵
寛麗会
加藤魏山
小金井洋之輔
宮川祐一

奉納

令和五年九月一日～令和六年八月三十一日
（一万円以上順不同・敬称略）

有限会社アク・サポート・スタッフ　今村　穣
有限会社金咲通産　金崎　強
株式会社ウチダハウス
禁式会社ティエラ・リサ・セシール　本道真智子
板橋 氷川神社　宮司　篠　直嗣
板橋 天祖神社　宮司　小林美香
上板橋桜川敬神講
高瀬講中　小野源一
有限会社 スペースシップ　梅原英明
有限会社小町建築設計事務所　小町幸生
有限会社 サンベアー　進藤喜一
福泉自動車 株式会社
三谷囃子連中
株式会社 清水製作所　清水浩久
武蔵野清運 有限会社　伊藤一太
別格本山 大明王院　竹田海衆
桜接骨院　馬場一行
馬場家・鶴田家
海老澤　健
小次郎工房
笹本英子
市川　実
市川良子
市川貴紀
渡邉真理
濵中満江
田中満男
小村高平
五十嵐金夫
小林利惠
成田八重子
椙山真美
横溝知幸
小泉清子
稲福正美
川西郁生
松本和治
杉田　陽
宮内寛光
小林　宏
中村洋人
城田安里躍
戸田浩二
東海林　守
杉本　恒
猪鼻悦雄
尾花勝芳
青木克夫
村松直樹
佐藤武久
大口　眞
渡邊敏雄
塩谷和弘
出井大輔
宮井利香子
宮井芙美子
梶　恵司
伊藤和子
川越麻友美
鈴杵睦彦

注連縄奉納

拝殿正面を飾る大注連縄等を毎年ご奉納いただき、気持ちの良い新年を迎えております。誠に有難うございました。

「御〆講　麻問屋 麻光」

太々神楽奏上

太々神楽奏上数が減少しております。一般の方でもお申込は出来ますので、お気軽にお問い合わせください。

令和五年九月一日～令和六年八月三十一日

青梅市観光協会
飯能市　飯能一丁目永代御嶽講中
川崎市　土橋講中
川崎市　馬絹講中
筑波大学宗教学ゼミ

https://www.youtube.com/watch?v=5Sb49nbuRMo&t=920s

神楽と雅楽の一般公開
夜神楽
YouTube にて公開中

敬神奉賛員募集のご案内

当社では、敬神奉賛員を募集しております。敬神奉賛会とは、御嶽大神の御神徳を敬う方々の集まりです。皆様の敬神の念により、武蔵御嶽神社が永続的に護持発展することを目的に創設されました。

奉賛員には例祭、祭典・行事のご案内のほか、新年に向けての御神札頒布など各種の特典が受けられます。趣旨にご賛同いただき、ご入会くださいますようご案内申し上げます

賛助費

特別会員（会社で入会希望の場合）　一〇、〇〇〇円
個人会員　五、〇〇〇円
家族会員（個人会員の同一世帯のご家族一名様毎）　三、〇〇〇円

※詳しくは社務所までご連絡ください。

神社の杜（六十三）

『これも世のため・人のため』

片柳　茂生

今年になって神社では、参道や神社周辺に立つ数十本の杉や檜などを伐採しました。どの樹も樹齢四百年はくだらないでしょう。中でも宝物殿の下参道脇にあった杉は、目通り（大人の目の高さの位置で幹の太さを測ること）は約四メートル、樹高だって二五メートルは下らないという大きな樹です。

ムササビの観察をしていた時に、拝殿脇の木から宝物殿の屋根を飛び越えてこの杉まで滑空するムササビの姿を何度か見たことがあります。

ムササビにとっても便利で頼りになる杉であったに違いありません。

数年前から、少しずつ参道階段の方に傾いているのではと神主の間では話が出ており、このままにして倒れてしまったら参拝者に被害が及ぶことも懸念されます。そうなってからでは大変と言う事になり、惜しみながらも伐採という決断に至りました。そして今年ついに伐採に踏み切ることになったのです。

何と言っても大きな木です、根元から一気にバッサリ！何て訳にはとてもいきません。準備から運び出しまで数週間かかりました。

まずは枝を落とすのですが、枝とは言えかなりの太さです。これをすべて落とすのも一苦労、さらに梢から二メートルから三メートル位の長さで何回にも分けてワイヤーで一本一本吊るしながら伐ります。一日に一本伐るのがやっとです。しかも伐る人は半日木に登ったままの状態で伐るのです。幹の周りを巧みに回りワイヤーを掛けそして切る位置や方向を決めチェーンソーを入れます、まさに空氏とはよく言ったものですが見ている方はハラハラドキドキの状態です。

こうして伐られたものは軽トラックで運搬？いえいえそんな訳にはいきません、すべてヘリコプターで運びました。後に業者に聞いた話ですが、この大杉五回以上は雷が落ちているだろうとのことでした。落雷に耐えよく五百年も生きていたものです。

参道の杉も同時に伐採しました。ケーブルカーの交換するところの少し下、ケーブルカーから見えるカーブのところです。この個所は七本の樹勢の弱くなった杉を伐採しましたが、これは、もし倒れてしまったら御岳山の命綱であるケーブルカーを壊してしまうからです。さらにケーブルカーを降りて神社に向かう参道の途中にあるミズナラも数本伐りました。これは楢枯れの被害にあい、落枝や倒木による被害から参拝者を守るために伐採しました。

今年の伐採によって、山の様相は少し変化し、ムササビやモモンガそしてフクロウなど生き物にとっては少し住み辛くなったかもしれません。でもこれも世のため人のためです、お許しください。でも次世代のために植栽の事もちゃんと考えていますよ。ご安心を。

イラスト：たいやきジロー

あとがき

「慎みて怠ることなかれ」とは日本武尊が東征の折、神宮を参詣された際に倭姫命より授けられた言葉です。

発生確率が上昇した巨大地震、激しさを増す気候災害、終わらない民族紛争など重大な事象が繰り返し起きています。これらを前にして人間が何をできるかを考えた時、冒頭の「慎莫怠也」（原典「古語拾遺」）との言葉が浮かびました。

自然に対しても他者に対しても謙虚に、あきらめることなく努力して生きていくこと。大神の言葉の解釈に差異はあるかもしれませんが、現代社会に生きる私達にとって大切な精神であると思います。

最後に、この半年間を無事に過ごせたことを御嶽大神に感謝し、毎年丁寧に教授下さる先生方、ご奉納頂きました皆様、各種祭典や行事に御協力・御協賛下さいました崇敬者の皆様、各所関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。また鶴巻育子様玉稿を有難うございました。

令和六年　九月二十九日発行
〔年二回発行・非売品〕
編集　武蔵御嶽神社
TEL ○四二八（七八）八五○○
FAX ○四二八（七八）九七四一
http://www.musashimitakejinja.jp/
印刷　㈱成和印刷

公式ホームページ　HP

武蔵御嶽神社公式ＳＮＳ　facebook

X (Twitter)　instagram